



「すとん」  
第19回大阪アジア映画祭  
インディ・フォーラム部門



俳優が、俳優の心に耳を澄ました二つの映画

坂本ちえ  
原雄次郎  
撮影寺西涼  
エンドロール音楽  
八木橋聰美  
栗山晃一  
本間淳志  
渡邊りか子  
五十嵐美紀  
村上真衣  
音楽馬原洋幸  
整音石橋佑也  
協力クラウドファンディング支援者の皆さま

# すとん 心玉



撮影寺西涼  
制作池松亞美  
岡崎森馬  
渡邊りか子  
整音黒須智貴  
久遠明日美  
山下諒  
歲三

脚本・監督 渡邊りか子

# 俳優・渡邊りか子が監督した二つの映画 『すとん』『心玉』

『グラフィティ・グラフィティ!』で主演を務め、『夏、至るころ』ではアシスタントプロデューサーを担当した経験を持つ俳優・渡邊りか子。初監督作品である『すとん』は第19回大阪アジアン映画祭インディ・フォーラム部門への選出を果たし注目を集め。そんな新鋭の渡邊監督による『すとん』、続く二作目『心玉(こころだま)』の二本立て上映が実現。撮影は『曖昧な楽園』『はこぶね』の寺西涼が担当し、出演者には今作が初主演となるモデルとしても活躍中の坂本ちえ、『ほなまた明日』で山田役を好演の松田峻汰らが名を連ねた。俳優である渡邊りか子監督ならではの視点で、俳優(だった人・である人)を主人公に、心に優しく寄り添った二作。

『すとん』 2024年 | 41分 | カラー | 16:9



東京で俳優の仕事をしていたさえ(坂本ちえ)は、コロナ禍を経て俳優を引退する。新たな環境で出会う人たち、両親の老いに触れる瞬間、旧友の支え。人生の途中で、すとん、と腹に落ちた瞬間。自分にしか聽こえない音。渡邊りか子が20代最後にやり残した1つとして映画を撮ることを決意し、完成した初監督作品。回想シーンでは、コロナ禍で俳優が抱えていた不安が日常生活の中でリアルに表現されている。「誰かのどんな人生の選択も祝福したい」という渡邊監督の想いが込められた渾身の一作。

『心玉』 2025年 | 44分 | カラー | 16:9



心玉(こころだま) = 摩擦によって出来る服の毛玉のように、気持ちの摩擦によって出来たもの。過去の恋愛をテーマに、俳優が稽古や準備運動で行う「シアターゲーム」を用いて、マツダ(松田峻汰)が心玉を吐き出すまでを捉えた実験的な映画。「シアターゲーム」は即興的なゲームも多く、自身の内面から生まれる言葉や哲学が垣間見え、セラピーに近い感覚に陥る瞬間もある。今作でもマツダは自身から湧き出る言葉を紡ぎながら、思考を巡らせる。目の前に対象(聞き手)がいることで、両者は反応し合い、揺らめき続ける。

池松壮亮(俳優) | 「すとん」コメント

自分がここに在ることを確かめるように、日常に訪れる不協和に飲み込まれないように、映画は確かに鼓動のリズムを丁寧に慎重に刻み続ける。愚直でピュアで、控えめな切実さと素晴らしい映像センスで、渡邊りか子さんの才能と人生が詰まっていた。人生のある時期を見事に誠実に爽やかに、上品な抑制をもって捉えた、忘れ難い作品。公開おめでとうございます。

金子鈴幸(脚本家・演出家・俳優) | 「心玉」コメント

体育館。二人の俳優によるセッションのような「シアターゲーム」。一人の俳優、マツダのぼつぼつとした語りに、絶妙なタイミングで挟み込まれるもう一人の俳優、ワタナベの「決められたセリフ」。そこからさらにマツダの心が導かれ、「心玉」が語られる。その過程があたたかくもとてもらりリンクだった。無邪気に一人の子供が遊んでいるようにも見えたが、交わした言葉からは物語が横溢しており、大人になるまでに積み重ねてしまつた「傷つきと傷つけられる年輪」を確かに感じさせる切なさに満ちていた。

「俳優」という存在を見る時、役というフィルターを通して正面から見ることが多いと思います。しかしこの二作品は、俳優そのものをななめ後ろから見守るような映画になりました。それはやはり、わたし自身が監督である以前に俳優だからなのだと思います。

一緒に、ななめ後ろから彼女・彼らの静かな心の音に耳を澄ましてみてください。

監督 渡邊りか子



2026年1月30日(金)~2月4日(水)

OttO(大宮駅西口)にて二本立て上映

OttO  
Extended Place